不定期刊行　　第589号　2016.09.04

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町岳陽高等学校

すり鉢窪カールは一級のお花畑　その2

2016年、飯田高校夏合宿（中央アルプス・縦走）8/6～9

（３日目）少し遅めの３：３０起床。満点の星。５：３０小屋発。鞍部まで登り、１本とっていると、赤なぎの直下から呼ぶ声がする。誰かと思いきや、Ａ君らが下りてきていた。偶然にも合流。３：３０に空木の避難小屋を出たとのこと。彼も元気を取り戻したようだ。

鞍部から２０分程登り詰めるとそこが南駒ヶ岳の頂上だ。頂上を我々が独占。３６０°の大展望を楽しむ。眼下に伊那谷の街並みが広がり、すぐ下に七久保の千人塚の池が手に取るように見える。自分が住んでいる松川町そして中川村も眼下に。小屋が大崩落地の際に建っているが、この崩落地は中川村、松川町から見ても、はっきりとみえる大崩落地だ。飯田高校の先輩でもある本多勝一氏は、高校時代に仲間と、この崩落地の右斜面オンボロ沢を詰めて、南駒に登ったことを山行記録‘愉しかりし山‘の中に記している。途中、木曽側から越百・南駒を経て空木方面まで行く登山者、何グループかに出会う。仙涯嶺の向こうに、越百へ続くなだらかな稜線が続いている。仙涯嶺は字のごとく結構な岩場だ。仙涯嶺を越え、なだらかな稜線を登れば、そこが越百山頂。９：４５。前越百の背後に松川烏帽子、飯田市のシンボル風越山もすぐそこだ。ゆったりとした時間が過ぎる。中央道、天竜川が手にとるように見える。‘赤石山は巍々として・・・‘皆で校歌を合唱。１時間ほどの時間を費やし、越百を後にする。越百へのルートは飯島町千人塚からシオジ平を経ての登山ルートがあるが、シオジまでの林道がかなり荒れ、車では入れない。歩きを強いられる。

校歌を合唱（越百山頂）

１４：３０すり鉢窪小屋着。到着した小屋には３名の登山者が。その一人が無線連絡をしている。どこかで拝見した顔だ。もしやと思い、声をかけた。「もしや、唐木さんではないですか」思った通り、伊那山の会会員、元中央アルプス遭難救助隊長で、現長野県山岳協会会長の唐木さんでありました。

今日は、この小屋の管理人さん（塩沢さん）と伊那市観光課の池上さんと３人で、小屋の点検を兼ねて、池山を登って来たという。私の顔も覚えていてくれました。しばらく

して、管理人の塩沢さんから、「小屋の後ろの大岩に、本多勝一氏らが南駒に登った証のプレートがはめ込まれているので、よかったら見に行きませんか」と声をかけてくれた。唐木さんも初耳だという。それは小屋の裏手のダケカンバの中の大岩にあった。プレートは、１９４８年、本多勝一、曽我富士夫、林豊氏の３名と顧問の渡邊先生４名で、高校３年生時、オンボロ沢経由で南駒ヶ岳へ登った時のことを記念して、飯田山岳会がはめ込んだものであった。本多勝一氏を知る人でなければ、きっと興味を持たないだろう。ひっそりとダケカンバの中に当時のことが偲ばれる、このプレートは、ちょっぴり悲しげであった。

（4 日目）唐木さんら３名は、今日、越百経由で木曽側に下るという。小屋の管理協力費、３０００円を箱に収め、３：３０小屋発。2 日目にきたルートを、空木岳までもどる。夜明け前のすがすがしさが心地よい。５：００　空木山頂。早朝ということもあり、まだ誰も居ない。

いよいよ、下山にかかる。ピークから２０分ほど下った下山道稜線にそびえる駒石は飯島、駒ヶ根の市街地からも、空木山頂からの稜線上に、はっきりとわかるくらいの巨大な花崗岩の巨石である。駒石近くの砂礫上に、コマクサが4 株ほど可憐なピンクの花を咲かせていた。

大地獄・小地獄は、池山尾根の中で、特に気の抜けない場所だ。何人かが転落遭難し、死亡事故も起きている。時間はかかるも、無事通過。山岳トレイルのトップの選手が、我々を背後から追い抜く。聞けば、日本海から太平洋に抜ける、毎年恒例の山岳トレイルの全国大会中だという。ＮＨＫがこの大会を、9 月下旬のＢＳプレミアムで放送予定だそうだ。明日は、長谷村の市ノ瀬から、南ア仙丈ヶ岳を超えるという。何度かＴＶで見た記憶がある。

途中、池山の避難小屋で水を補給。最初、小屋のすぐ脇に水場があるはず。が、痕跡は残るが水が出ていない。ほとんど｀空｀状態で、この水場での補給を期待してきた我々にとって、ショックは大きい。あきらめかげんで小屋を離れた５０ｍほどの所に、現在の新しい水場が。冷たい水ががんがんと流れ出てました。いやー。命拾いしました。

登山口である菅の台上部の駐車場は、今は整備され、20 台くらいは駐車出来るが、県外車で一杯であった。さらに1 時間ほどだらだらと下り、ようやく菅の台バス停着。

無事下山。皆、お疲れさま。バス停近くの食堂で、ソースかつ丼とそばを腹に詰め込み、ローカル線の車中に。

（感　想）中央アルプス縦走は、南アルプス縦走より断然、厳しい。

編集子のひとりごと

山頂の校歌斉唱、大先輩の本多勝一氏のこと、やはり伝統ある山岳部の面目躍如。復活したA君が、朝３時半に出発して追いついてきたという美談。やるじゃない！３泊４日、ここにも大きなドラマがたくさんありました。中央アルプスが南より厳しいとは･･･行ってみたくなりました。他の学校も面白いレポートがありましたらぜひ！（大西　記）